

## 折れそうな心を救った シンプルな言葉

創立135年、おめでとうございます。伝統に甘えることなく、さらにチャレンジを続けられる同志社女子大学に敬意を表するとともに、今後のさらなるご発展を心からお祈り申しあげます。

今日の私のテーマは「自分らしく生きる」。私は短大卒業後、日本経済新聞社の電波報道部にいました。株式概況や経済ニュースを読む部署にいましたが、もつとラジオやテレビの仕事がしたくなり、NHKアナウンサーだった高橋圭三さんの事務所に所属して、フリーで仕事を始めました。私の若い頃を振り返ると、好きなことにチャレンジして自分なりに頑張るとそれが叶うというふうに、ラッキーだったと思います。結婚後は引退し、翌年、息子を授かりました。

ところが我が子は、思いもよらないハンディキャップを持って生まれてきたのです。最初、私はそのハンディを受け入れられませんでした。私は本来前向きで明るく、少々なことではめげないタイプです。しかし息子は小眼球症という、眼球が小さくて育たない稀な症例。光を感

かくどうやって育てたらいいのか見当がつかない」とお話ししたところ、彼女のアドバイスは大変シンプルなものでした。「あまり難しく考えないで、普通に育てればいいんじゃない？」

## 「見えないこと」を怖がらず 母子で育てた豊かな感性

「普通」とはどういうことでしょうか。私は、息子の目が見えないから美術館やお花見に連れて行くのはかわいそうだ、などと考えていました。でも「それは違う」と福澤さんはおっしゃる。他の部分を使って感じられることはたくさんある。あなたが行きたい場所、やってみようことに彼をいつも連れていきなさい。視覚障がいや怖がらず、あなたのできることを説明すればいい。そうすれば、あとは彼が感じ取ってくれますよ、と。

### 略歴 辻井いつ子（つじい いっこ）氏

東京女学館短大卒業後、フリーのアナウンサーとして活躍。1986年に結婚、88年に伸行氏が誕生。生後間もなく全盲とわかり、手探りで子育てを開始、プロピアニストへと二人三脚で歩んだ物語は大きな感動を呼んだ。その経歴を生かして、子育て応援サイト「辻井いつ子の子育て広場」を開設、講演活動なども行っている。  
<http://kosodate-hiroba.net>  
主な著書に「今日の風、な色？」（アスコム刊）など。

## レクチャー

# 自分らしく生きる

～未来の扉をひらくのはあなた～

ピアニスト辻井伸行氏の母  
辻井いつ子氏



じることでもまったくできないと告げられました。この子は生まれてきて幸せなのか、とまで考えてしまった。3か月くらい、自分が自分でなくなるほどナーバスになっていました。とにかく視覚障がいに関する情報を求めて本を読みあさったところ、1冊だけ心に響く本に出会いました。福澤美和さんの『フロックスはわたしの目』というエッセイでした。

福澤さんは福澤諭吉のひ孫にあたる方です。当時は童話作家をしながら、盲導犬を紹介する講演活動を全国でなさっていました。私はその本を読むまでは、視覚障がいや非常にネガティブに捉えていたんですね。行動範囲が狭いのは、楽しみの少ないのではと。ところが福澤さんはとてもポジティブに生きていらっしゃる。自分の仕事に誇りを持ち、盲導犬と共に日本各地を旅行することを楽しみになさっている。私は自分の物差しだけで視覚障がいや捉えていたことが大変恥ずかしくなり、お蔭で気持ちが明るくなりました。

福澤さんへのお礼を録音して編集部に送ったことがきっかけで、ご本人にお会いできました。芯が一本通る、すべてが自然体の、大変素敵な方でした。一とに

私は気持ちが一気に変わり、私の大好きなお花見に息子を連れていきました。最初は桜の花や木を触らせて、こんな感じだと教える。日本には桜という花があり、春になると皆が桜を見に集まってきたお弁当を食べたりするのよ、と話す。すると彼は花に触れたり、散り際の花びらが顔に当たったりするのが大変心地良かったらしく、お花見をとても楽しみにするようになりました。

夏は花火も観賞しました。お腹に響くドーンという音を彼はとても喜び、「今どんな花火が上がったの？」と尋ねる。私は「オレンジ色のヒマワリの花火が上がって、落ちてきましたよ」と実況中継する。できるかぎりたくさん説明する。彼はそれを頭の中でイメージしながら空を見上げ、手を叩いて喜んでいました。ただ、色を教えるのは非常に難しかった。

## 演奏者の違いを聴き分けた 8か月の我が子

彼の音楽の才能に初めて気づいたのは生後8か月の時です。当時、CDをかけていると彼は上機嫌でした。彼が一番好きだったのはクラシックのピアノ曲。特にショパンの「英雄ポロネーズ」を聴くときのすごくテンションが上がり、嬉しそうに足をバタバタさせる。それはスタニスラフ・ブーニンのCDでした。やがてCDに傷がつき、音が飛ぶようになってしまった。買い直しにいきましたが、たまたま同じCDがない。私は深

く考えることなく、代わりに「英雄ポロネーズ」が収録されている違うCDを買って帰りました。ところが息子はまったく反応せず、ちっとも喜ばない。私もよく聴いてみると、同じ曲でも演奏者が代わると、ちよつと感じが違うことに初めて気づいた。もしかすると、と思い、改めてブーニンのCDを買ってきける。と、案の定嬉しそうにバタバタと喜ぶ。

## ある日隣室からジングルベルが

この子は演奏者の違いを聞き分ける耳を持っていてるんだと思つて非常に嬉しかったと同時に、私は彼とコミュニケーションが取れた気がしました。

その後息子のために、おもちゃのピアノを買いました。ハンディを持つ彼に何か一つ、好きなもの、心の慰めになるものを見つけてやりたいという思いからでした。彼が望んだ時はバイオリンも習わせ、何にでもトライさせてきました。

もだめ。だからピアノを弾く彼の穏やかで嬉しそうなお表情を見て、これから音楽は彼にとって無くてはならないものになるのではと思ったのです。

その後ピアノのレッスンを始めたわけですが、私はピアノが嫌になつて2年で辞めてしまった人間なので、あまり厳しくない、近所のお姉さんのような先生にお願いしました。初めはうちに遊びに来ていたとき、1時間ピアノを弾いていた。だくという形でした。息子は非常に穏やかな表情をしている。そのうちだんだん自分も弾きたくなつてきて、先生の膝に乗って音を探るようになった。そこからレッスンをしきものが始まりましたが、当時は彼もレッスンとは思つていなかったようです。5歳くらいになると、短い曲ですが、いろんな曲が弾けるようになっていました。

## 「ブラボー」の嵐を契機に目覚めた聴いてもらう喜び

家族でサイパン旅行をした時のこと。夕方ショッピングセンターに行くと、自働演奏のピアノが鳴っていました。息子は1曲でいいからこのピアノを弾きたいと言ひ出した。そして当時流行っていた

リチャード・クレイダーマンの「渚のアデリーヌ」を弾きました。息子は5歳です。買い物客がどんどん集まつてきて、演奏が終わるとすごい拍手が沸き上がつた。「ブラボー」とか「君は天才だ」とか口々におつしやつて、ハグしたりキスしたり、大騒ぎになりました。

彼は大変嬉しかつたようです。知らない人の前で演奏したことさえ初めてなのに、自分の演奏でこんなにみんなが喜んでくれる。ピアノストになりたいと思つた原点は、その時のすごい拍手と褒められたことだと、今も言います。もしかしたらピアノが彼を明るい方向へ連れていつてくれるのかなと感じた、私たちにいつても忘れられない出来事でした。

それからは運命みたいなものが、どんなピアノの方に近寄つてきた感じですが、埼玉県から東京に戻ることになつた際、その後12年間お世話になる、東京音楽大学の川上昌裕先生と出会いました。息子は川上先生の生徒第1号になり、週2回のレッスンを毎回来しみにしていました。そして小学1年生で、全日本盲学生音楽コンクールで優勝。息子と私は大はしゃぎでしたが、主人は医師という職業柄、冷静でした。今は学校の勉強をきちつと

して、いずれ資格を取り仕事を持てるようにすることが大事なのでと。親として正論ですし、私も同感でしたが、あまりにも本人のピアノに対する思いが強いので、私は息子に「ピアノは二の次にしなさい」とは言えませんでした。

5年生で、一般のコンクール「全国PTNAピアノコンペティション」に挑戦しました。予選を経て全国決勝大会のある、大規模なコンクールです。私はそこへ行つて初めて、ピアノに本気で取り組むお子さんたちを見ました。その上、お母様たちの気合いが怖いほどののです。

息子の演奏を私はいつも褒めていましたが、控え室のお母様たちはお子さんが演奏から戻つてきた瞬間、否定的な言葉から始めるんですね。「どうしてあんなに速く弾いたの?」とか。息子はそういう言葉を聞いたことがないので、「だめな箇所を先生に指摘されるのは納得するけど、もしお母さんにされていたら、僕は辞めていたと思うよ」と言っていました。

子どもは親から無条件に褒めてもらいたいもの。息子は、私がいつも驚いたり褒めたりするので、今度はもつと上手に弾いてもつと驚かせようと、面白がつて練習する子でした。そして、そのコンク

ールで千人の頂点に立てたことで、彼の努力やピアノに対する情熱が半端ではないことを主人も理解し、将来は音楽学校への進学を考え始めたのです。

## ピアノ以外のさまざまな体験が豊かな表現力を育てる

かといつて息子はピアノだけに熱中していたのではなく、あらゆることにチャレンジしたがる子どもでした。水泳が大好きで、スイミングスクールに中学3年生の終わりまで通っていたし、スキー、乗馬、登山など、かなり危険の伴うものにもチャレンジしたがりでした。

中学生の時に大きなコンサートがあり、その10日前に学校で2泊3日の登山が予定されていました。さすがに川上先生は、登山は中止しなさいとおつしやつた。しよけていた息子を、私は行かせました。学校行事はその時にしかないし、戻つてから本番まではまだ7日ありましたが、川上先生はあきれておられました。初めて登山から戻つた息子は、山頂に着いた時の喜びや自然との触れ合いを嬉しそうに話してくれました。ああ、行かせて良かった。この経験は、きつとピアノの音にも反映されるだろうと思ひました。



よく息子の音楽に対して、とても気持ち明るくなる、元気になるというお声をいただきます。ピアノだけでなく、彼が毎日いきいきと生活して感性が磨かれれば磨かれるほど、良い演奏につながるのではと思うのです。音楽家のお母様から見ると、私の子育ては邪道に思えるかもしれませんが。でも息子には音楽家になる以前に、一人の人間として心豊かに育ってほしい。素敵な感性を持った大人になってほしい。自分のやり方を全うして間違いないでなかったと今は思います。

### 我が子に世界への扉を開かせた母のチャレンジ精神

息子だけでなく、私もまた、出会いやチャンスがあれば生かそうとしてきました。日本を代表する指揮者、佐渡裕さんとの出会いもそうでした。

雑誌のライターをしていた友人が、たまに佐渡さんのインタビューを担当し、興奮してうちに遊びにきた時のこと。私は、あんな素晴らしい指揮者に一度伸行のピアノを聴いていただき、アドバイスをいただけないものかと思いました。そこで息子のコンサートのテープを佐渡さんに渡していただけないかと、その場で

友人に頼みました。テープを聴いてもらえなかったら、ご縁が無かったということ。でもテープを渡さなかったら、1パーセントの可能性さえ無くなってしまう。

佐渡さんはお忙しい中、テープを聴いてくださいました。音に透明感があり、今まで聴いたピアノと違うと非常に興味を持たれ、息子に会いたいと言ってくれました。12月、私たちは佐渡さんの第九のコンサートへ行き、終演後に楽屋を訪ねました。すると、楽屋のピアノで何か弾いてとおっしゃる。息子が弾き始めて5分ほど経つと、佐渡さんは大粒の涙を流された。そして「いい演奏だったよ。今度一緒にやろうな」と、息子を温かくハグしてくださったのです。

佐渡さんは1か月後に連絡をくださいました。そしてなんと無名の中学生がパリのサルガヴォー劇場で、当時佐渡さんが指揮をなさっていたラムルー管弦楽団と一緒に、モーツァルトのコンチェルトを演奏できることになったのです。

佐渡さんはその後息子をいろんなコンサートに誘ってくださいました。佐渡さんとの出会いには本当に感謝しています。音楽家でもスポーツ選手でも、本番

に強いというのは本物になる上で重要なこと。小さい頃から多くの舞台を経験できたことは、息子にとって大きな財産になりました。コンクールを勝ち抜いたのも、それらの経験が大きかった。もしあの時、勇気を出して友人にテープを渡さなかったら、もっと違った形になっていたかもしれない。だめでもととで一步前に踏み出すという私のモットーは、間違っていないかと思っています。

### 無欲でつかんだヴァン・クライバーンの優勝

息子は高いハードルを設定して、それを跳び越えることが好きでした。高校2年、17歳で初めて国際コンクールのシヨパンコンクールに挑んだ時もそうです。

息子は挑戦を楽しみ、30名のセミファイナリストに残りました。ただ最終審査には残れなかったため、いつか国際コンクールのファイナリストになることが彼の第一目標になりました。

その後、20歳でヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールに挑戦しました。非常にハイレベルな参加者の中で、息子は1次、2次を通過して最終の6名に残りました。国際コンクールのファイナリ

ストになれたのです。彼はとても喜び、

「これで大きな誇りと自信が持てたから、入賞や優勝など、大それたことは考えていない」と言う。私も同じ思いでした。

1次ではとても良い演奏だったのに、最終審査では優勝を意識し過ぎるあまりどこか優勝狙いのような演奏になる人もいました。息子の場合は無欲な姿勢と、

音楽が心から大好きという気持ちで弾いたピアノが、審査員や聴衆の方々の心に響いたのでしょう。結果発表でクライバーン氏が「ノブユキ・ツジイ」とアナウンスした時は、本当に映画のワンシーンの中にいるような思いでした。1位は2人いましたが、20歳の記念に出場した国際コンクールで日本人初の優勝というタイトルをいただけたのは、一所懸命やってきた彼に神様からご褒美が出たのかもしれない。人間の持つ可能性の素晴らしさを、私は我が子から教えられた気がしました。

### 我が子の巣立ちを見届けて自身のチャレンジが再び始まる

私は周囲から何を言われても、彼の可能性だけはずっと信じてきました。我が子の可能性を親が信じなかったら、いったい誰が信じるのでしょうか。そして、諦めずに続けてきたことが今日につながったのです。このコンクールで優勝してから、私たちは非常にいい形で親離れ、子離れができました。彼の方から「もうコンサートに同行してくれなくていいよ」と言ってきたのです。今度はお母さんの好きなことをすればいい、昔の仕事に戻

ってもいいよと。

私は息子を育てた経験を生かし、今日のような講演活動が続けていくつもりです。子育てに悩む方、いろんな悩みを抱えておられる方が私の話を聞いて、少しでも元気になってくださればと願っています。また自分自身、新たなことにもチャレンジしたいと思っています。ラジオのパーソナリティーなどもやってみたい。先日は初めて自分でデザインした服でトークショーもしました。年齢に関係なく、自分がやりたいと思った時にチャレンジすれば、人はどんどん進化するものですね。

今日の会場には、これから輝かしい未来の待つ学生さんが大勢おられるし、私と同世代の方もおられます。どなたも未来に対して諦めずにチャレンジしていけば、きっと夢は叶うのだと思います。

（2011年10月16日、松下IMPホールでの基調講演を編集して掲載）

